

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

宮城



日本作文の会 編

日本の 子どもの詩

宮城

岩崎書店

日本の子どもの詩 4 宮城

一九八一年八月二五日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九一二
電話(〇三)八二二・九一三二(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ぜんたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などともよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいとなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくரிだした芸術（現代の子どもの『わらべうた』）としても、大きな意味がありましよう。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「宮城編」であります。どうぞ、ひとつひとついいねいにお読みください。

もくじ



1918
~
1945

8

竹
かめ山

朝

朝

9

夕もや

影

ユミヤ

10

埼玉に行く姉たち

ボールとり

すずめぼい

11

山

小川

トンボ

ニイヌマセンセイ

12

ユウベ

つゆ

泉ヶ岳

13

とうふひき

14

稲刈り

さびしい道

かげ

朝

とうふかい

水

朝露

15

タンカイトウ

若葉の下のねえさん

ある時

16

子もり

母

17

いも

夕日

工場

18

うでずもう

堀はらい

19

暴力月夜

雪ふるな

20

麦の脱穀

村のけしき

32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22

32 仙台のつとめからかえるおとうさん
31 宿題をおく夜
30 いねこさ
29 かきつなぎ
28 水くみ
27 赤い羽根
26 かいこ
25 たんぼ
24 あぶくま
23 いどの水
22 そら
あひる
開こん



1945
~
1959

44 妹
43 のら犬の子
42 麦ふみ
41 家 朝
40 およめさん
39 かあちゃん
38 父の顔
37 夕ごはん
35 映画・青銅のキリスト
34 馬
33 きのは
ふゆのようい
しばくさ
炬ばた
本だい



1960
~
1969

46 ヒマラヤすぎ
47 きゃほつ
47 しょうぶゆ
48 かいがら
48 かたつむり
49 わたしの田んぼ
49 おるすばん
50 ちちしほり
50 かあちゃん
51 あせ
51 うんどうかい
52 子牛が生まれた
52 麦こき
53 ヤドカリ
54 冷害
54 雨のねだん
55 秋の日のプール
56 かかし
56 かあちゃんへ
57 しその実とり
57 さむいあさ

58 父
58 夜のひととき
59 じてんしゃにのせられたこと
59 糸まき
60 あわぶく
60 まほう使いだったら
61 おれには心がある
61 おかあさんはやくかってね
62 うしのつめきり
62 せんせいのおしゃれ
63 牛
63 あめのおんがく
64 はちろうがた
64 ぼくが大きくなったら
65 自転車
65 おりんぴつくってなあに
66 乾電池
66 たんけん
67 死
67 ひとりごと
68 あたらしい船
68 PTA
69 かあちゃん
70 新聞
70 じかんひょう
70 とうちゃん

71 先生のサロンパス

生命

72
つくえ

勉強

73
あくま

心の火花

1970
~

76 田おとし

おとうさんの手

77
かげ

あらし

78
うみ

のてんぶろ

79
かみなり

ざりがに おやじ

80
うみ

おかあさん

たばこ

82
毛虫

はせがまの海

さむい夏

84
たい風

85
草とり

お日さま顔だして

86
イサダとり

夜明け

87
秋になつたら

88
イナゴのお客様

あき

バス

おとうさんになったら

90 あたらしいきょうしつ

おかあさん

91
時間

天国のおかあさんへ

学級委員のせんきよ

93
べ
こ

にわとり

94
しやくにさわる

95
はい色の空

わたしの名前

96 父の原こう書き

おにちゃんの勉強

97
ぼくがご飯や味噌汁を作る

98 過疎の村にきたおぼん

けんか

99 だるまきょうそう

算数の時の先生

100

台上前転

集金袋

101

高村光太郎

れんらくノート

102

ほんとなのかな

わたしは迷子

お母さんがないた

ベトナム

103 104 106

夕方

たばこ畑

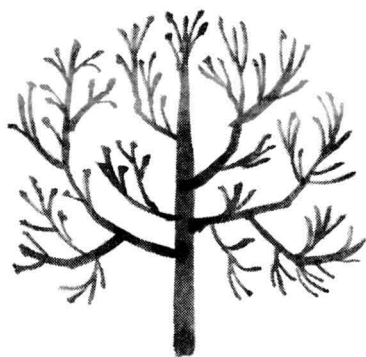
*

107 110

あとがき——宮城県の子童詩指導の歩み

この本の編集をした人たち





1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

* 「竹」「朝」などに代表される
児童自由詩時代。宮城の子ども
たちの作品が後期の「赤い鳥」
に顔を出し始めた。

* 児童生活詩。生活を凝視し、自
分を見つめ、家の生活に心をよ
せた作品が生み出された。
「トンボ」「ニイヌマセンセイ」
などが、「生活詩集」に掲載さ
れた。

* 白河以北一山百文といわれた、
北方の生活がにじみ出た作品が、
数多く生み出された時代。

竹

竹の葉に蟻がはつてた、
私が、

つづり方をかいていた前の竹に。

本吉郡鹿折小浦島分校

小野寺稔 小3

かめ山

かめ山 くもつてた。

向うの島もくもつてた。

こっちはくもらない。

あつちばかりくもつてた。

おらはうれしい

おらはうれしい

畠山とき子 小3

本吉郡鹿折小浦島分校

8

朝

かつこう鳥の声に
白く光る障子。

朝

雨あがりの曇った朝、

土がしめっている。

山がぬれて見える。

重ったるいような朝、

馬車の音が土に重くひびいた。

阿部和子 小6

仙台市土樋校

土橋 力高 2

柴田郡村田校

タモヤ

暗い林が見えた。

わたしは、

ひとりぼっちだ。

池のはたに

鴨^{かも}がいて、

向うの戸が、

夕日をうけて、あいたよ。

影

母が鍋^{なべ}を洗^{すす}ってる。

そばの水たまりに

母がうつってる。

昼^{ひる}にちかくなった。

川瀬 正 小 4

仙台市東二番丁校

八島修二 高 1

名取郡玉浦校



ユミヤ

ユミヤヲ コシラエマシタ。

ヒノミノ カネニ

アテカタヲ シマシタ。

ワタシガ アデテ ミマシタラ

カネニ アタリマセン

ゲンジサンガ アデテ ミタレバ

アタリマセン。

ゲンジロウサンガ アデテ ミタレバ

アタリマセン。

ナンベン シテモ アタラナイノデ

カエリマシタ。

大内 正 小 1

黒川郡大衡小大瓜分校



埼玉さいたまに行く姉たち

森政吉 小6

寒いシモの朝

ふたりの姉がサイタマにかされていく。

出だす時、おずんちやに

「いってくつかんね」と姉がいった。

おずんちやが ろばたにあたって、

顔をさげて声ひくく

「う」といった。

姉が うす暗い朝の道をとぼとぼといった。

おれは、これから はたらかなくては

(いけないのだな)
かんねんだなと思った。

姉もサイタマで じょうぶでろと思って

姉の行くのをだまって見ていた。

柴田郡小泉校(指導)鎌田孝

ボールとり

高橋誠一 小4

あせが目にはいる

水のみに 行ったら

水道がこんこんなっていた

後の方で

わあわあときの声があがった

ボールが空をとんだ

仙台市南材木町校(指導)佐々木正

すずめ(追い)ぼい

伊藤三郎 小5

すずめぼいをした

ガンガンガンと かんをたたいた

すずめはピイピイピイとにげて またくる

だんだんにあきた

「とうちゃん あど(もう) えがす(い)べ」

と 家にきていったら

「このやろ (野郎) いうこときかないと (言うことをきかないと) だ
ごはんかせねど (ご飯) (食べさせないぞ)

と とうちゃんに おこられた

ぼくは なきながら かんをたたいた

登米郡北方校(指導)菊地新

山

山岸清二 小2

山は

雨がふると

ねむかけする

てんきがよいと目がさめる

名取郡中田校

小川

早坂ふくよ 小6

前の小川に、

ぐみの木から、

雨あまだれが落ちた。

大きく輪わをかいで消きえてしまった。

また落ちると

水が、ふえたような気がした。

向うの赤い木

葉がちりそうだ。

宮城郡広瀬校

トンボ

浜口六男 小1

キョウトンボ

サツパリコナイ。

マダネツタンデナイカ。

亘理郡荒浜校(指導)佐藤みさ江

ニイヌマセンセイ

熊谷正一 小1

ニイヌマセンセイ、

風ニフカレテ、トオイガツコウサ

イグンダドナ。

オレ、ニイヌマセンセイ
(オレハ)イロバイイナ。

五ネンセイダノナイタ。

ニイヌマセンセイモゾコイナ。
(カワイソウダナ)

ドコマデイッテモ風ニマケンナ。

ナンボサムイダッテモドッテクルナ。

亶理郡荒浜校(指導)佐藤みさ江

ユウベ

ワタナベヤエコ 小1

ワタクシ ネムル トキ カゼガ グウグウ
フイタ。

ワタクシ ビックリシタ。

ワタクシ ネムツタノマデ

カゼニ オコサレタ。

オカアサンモ モツクリ オキタ。

亶理郡荒浜校(指導)佐藤みさ江



つゆ

雨がはれた。

柿の木に

つゆがたまっている。

風が吹いた。

つゆが雨のように降った。

柴田郡村田校(指導)鎌田孝

泉ヶ岳

庄子まさこ 小5

泉ヶ岳をみていると

太陽がてらして

ぴかぴか。

泉ヶ岳の上に

雲が川のように

流れている。

宮城郡広瀬校(指導)沢畑正一

山家千代二 小5

とうふひき

堀江喜久治 小5

僕はとうふひきだ。

ふむと

かんの豆が

とんとんおちる。

つぶれた豆が

ぼたぼたと下の箱にたまる。

ふめばふむほど

あせが

ぼたりぼたりおちる。

仙台市南材木町校(指導)佐々木正

稲刈り

佐々木ちね 小6

寒い日

小雨降る日

稲刈している私

からだはもうびっしよりだ

早く日がくれる

もう一反刈らねばならぬ

登米郡豊里校(指導)吉田ふみ

さびしい道

国分みよ子 小6

妹と二人

さびしい道をいった。

進があっちらから

馬をつれてきた。

馬がいつてから

ふりかえって見た。

刈田郡斎川校(指導)新川健

かげ

及川郁郎 小6

青田に

人のかげが動く。

稲の葉がゆれる度にかげが

ゆらゆらゆれる。

登米郡宝江校(指導)菅原真静

朝

及川紳四郎 小6

見渡す限りの草原

緑が^{みどり}けむっている

馬のいななきが

もやの中にかくれてゆく

登米郡宝江校(指導)菅原真静

とうふかい

福原みさを 小5

とうふを買いに

ざるを持って家を出た

てっちゃんとの家まで来たら

朝の青白い月

西に低くかたむいて

とうふ屋ではまだ戸を明けない

手の指

もげるようにつめたかった

志田郡志田校(指導)岡本二三男

水

鈴木定一 高1

水は大きな心を持っている。

木も

山も

空も

私までのんでいるではないか。

登米郡中津山校(指導)志村敏行

朝露^{あさつゆ}

狩野希雄 高1

波一つない沼、^{ぬま}

こも草が一ぱいはえている。